



# ガーデン



スワプナ

空は濁っている。目を凝らしても星なんてどこにもない。そんなことわかっていた。それでも探してしまうのはなぜか。

まだ意識ははっきりしている。地面の冷たさが心地よく伝わってくる。ずっと悩まされていた背中の痛みも気にならない。今となっては、こうして寝転がっているのも悪くない。

さわがしく人が集まって来る。恐る恐るのぞき込んでいる。そっとしておいてくれればいいのに、彼らは誰かに話したくてうずうずしているのだろう。

ずっと他人ごとのように思っていた。まさか自分の身に降りかかるなんて。でも不思議な感じがする。ついさっきまでいつも通りだったというのに。

事件が起こったのは一週間前だった。駅前のイルミネーションも消え、店先に漏れていた騒がしい音楽も聞こえなくなっていた。人通りも少なくなり、ほの暗い街灯が頼りなく石畳を照らしていた。

時折、酔っ払いや、弾き語りののがなり声が風に乗って流れてきた。しかしそれは静けさの中でのことだった。

そんな空間を少年たちが切り裂いた。視界に二十五、六の青年がよろけて入って来た。つづいて汚い言葉を吐きながら、少年たちなだれ込んで来た。割れたガラスのようにギザギザに尖った怒声は、閑散とした街に撥ね返って響いた。

六人の少年たちは、よってたかってその若い青年を殴り、そして蹴った。まるでゲームでも楽しむようだった。青年は何も抵抗できなかった。逃げることもできず、その場に崩れ落ちてしまった。それでも少年たちは手を休めなかった。やがて青年はぐったりとして動かなくなった。

銀髪の少年は青年の懐をさぐり、とどめにもう一発蹴りを入れた。そして少年たちは笑いながら去って行った。

少年たちは人の目などまったく気にしていない。止めようとするものも誰もいない。関わりを持つと、ひどい目に合ってしまう。見て見ぬふりをしている方が利口だ。余計なことをすると、今度はその矛先が自分の方に向いてしまう。運が悪ければ取り返しのつかないことになってしまう。安定した生活を狂わすことはできない。この場所をただ目を伏せて立ち去れば、数分後にはいつも通りの生活に立ちもどることができる。その出来事も、見終わった映画のようにすぐに気にならなくなる。

少年たちはさすがしげだった。傷ついた青年のことなど何とも思わない。彼の生活や、近いまわりの人たちのことなど考えもしない。少年たちにはそんなこと関係ない。少年たちは、仲間にこの事得意げに話すかもしれない。まるで誇らしいことでもあるかのように。

青年は何もできない。言いたいことも言えない。慌ただしくやって来た救急隊員に運ばれて行  
くだけだ。

悪夢のような夜が明け、また新しい朝がやってくる。翌日には普段の通りにもどっていた。昨  
夜のことなどなにもなかったようだった。ただ冷たい石畳には黒く乾いた血痕がひとつふたつ残  
っていた。それだけが昨日の出来事を物語っていた。

太った大きなハトはのどを膨らませ、痩せた小さなハトのエサを横取りしている。痩せたハトは抵抗もせず、ほかを探す。太ったハトは後を追いかけて、また横取りする。そんなことをずっと繰り返している。

ずる賢いカラスはネコをからかって面白がっている。いじめ慣れたネコは身を縮め、光のない目で彼らをにらみあげる。調子づいたカラスは嘴で、毛の抜けた痛々しいその背をつつついている。

樹木の生い茂る中央公園には、図書館や城跡がある。奥に行くと深い森が広がっている。大きな樹木の枝には小鳥がさえずり、リスなどの小動物が駆けまわる。

休日には子供連れの家族でにぎわう。小さな子供は芝生を走りまわり、若いカップルは言葉も少なく静かに寄りそっている。

広場では大道芸人の手品に湧きあがっている。通りに並ぶ露店は客が行列をつくり、ごった返している。

ごみ箱に捨てられた新聞には、昨日のテロのことが報道されている。それはもっと大きな暴力に広がっていくことを予感させる。

指導者たちは正義を訴える。自由と平和を叫んでいる。民衆はそんな言葉に目色を変え熱狂する。

どこかで子供たちは飢え、大人たちの犠牲になっている。しかしそれらに目を合わせない。そんなことより優先するものがある。保身を考える。小さなものは見放し、大きなものに擦り寄る。

「あのう……」

若い女性の声に僕は顔をあげた。

目の前に立っていたのは、二十代半ばの顔立ちの整った清楚な女性だった。それでいてどこか華やかな雰囲気漂っていた。黒い瞳と黒い髪が印象的だった。

「数日前に起こった事件のことでお聞きしたいんです」

彼女の目は真剣でまっすぐに僕に射られていた。

「何でしょうか？」

僕は彼女に目を合わせた。

「どんな少年だったか教えてください」

そのまなざしには怒りと哀しみが見て取れた。

胸を掻きむしられる思いだった。彼女の強い意志と、覚悟が伝わってきた。

「どういふことでしょうか？」

僕は静かに彼女に言った。

何かを考えているのか、それとも言えないでいるのか、彼女はなかなか口を開かなかった。

僕は黙って、彼女が言葉を発するのを待った。

「彼は意識不明の重体です。今とても危険な状態です。もし、助かったとしても一生目を覚まさないかもしれないと言われました」

彼女の瞳は、遠くを見やるようにふっとゆるんだかと思うと、涙であふれた。

しかし彼女はその滴をこぼすことなく、再び強い光を僕に向けた。彼女の意志の強さを感じた。

「どうして助けてくれなかったのですか！」

僕はその有無を言わせない強い言葉に、何も答えられなかった。

「少年たちは何の権利があつてあこまでなければいけないのでしょうか？」

「そのとき、ぼくはここにいなかったんです」

「嘘です。弾き語りの少年が、あなたが一番近くにいたと言っていました」

彼女はきっぱりと言った。

「あなたはどうしたいんですか？ 復讐でもする気ですか？」

「わかりません。ただ彼らに言いたいことがあるんです」

「警察に任せざるべきだと思います」

僕はそう言って後悔した。

うすっぺらな言葉だった。自分で言いながら、無責任な他人ごとのように聞こえた。彼女の冷め切った眼差しが、何よりもそのことを語っていた。

「では本当のことを言います」

僕は声を強くした。

「たしかにその場にいました。でもあたりが暗くて特徴も何もわかりませんでした。だから、あなたに教えたくても何も教えることはできないんです」

彼女はバッグから手帳を取り出して開くと、何かを書きつけた。

「これ、わたしの携帯の番号です。もし何かわかったら教えてください。暗かったとしても、もう一度見ればわかるかもしれません」

彼女はちぎり取った頁を僕に手渡し去っていった。

僕は手渡されたメモの切れ端に目をやった。乱雑に切り離された白い紙片の真ん中には、算用数字と彼女の名前が走り書かれていた。

少年たちがもう少し歳をとり、その身に不幸が降りかかったとき、他人の痛みを知るのかもしれない。彼らが「少年」と呼ばれなくなったとき、もしかすると自分たちの行為を後悔するのかもしれない。しかしそのときには、またどこかで彼らのような少年が現われて、同じことを繰り返しているに違いない。いつまでたっても暴力はなくなる。いつまでも同じことが繰り返されている。

「今は怖いものだらけだよ」

かつては不良と呼ばれて、怖れられていた知人は僕にこう言った。

彼は毎日のようにケンカし、ドラッグを売買し、そして少年院に入ったりもした。そのころ彼は怖いもの知らずだった。

魑魅魍魎は跋扈する。荒廃する瓦礫の街をさ迷っている。それはグロテスクで滑稽だ。まわりには無関心で、目先のことだけに目を向ける。

灰色の背広を着た男は、どこか異質に映った。サラリーマン風の彼は、物静かで他の人とは雰囲気が違う。年齢は四十代前後か。人と違った格好をしているわけではなく、浮いて見えるわけではない。しかしどこか違っている。まわりの人たちの騒音の中で、彼だけが静かなメロディーを奏でている。

この世界にやって来た異次元の生命体は、そのありさまを哀れんでいるのか。誰もが破滅に向かっていることを知ることができる。斜面を転がる雪のつぶてのように、それは加速しどんどんと巨大化して行く。ところがそんなことに気にとめない。雪の固まりは、まだ遠くに小さく見えているだけだ。まだまだ先の話だ。そのうち何とかできるだろう。

よちよち歩きの幼児は頼りなく危険だ。誰かの支えが必要だ。自らのどに刃先を突きつけて笑っている。

異次元の生命体は見るに見かねて、手を差し伸べようとするかもしれない。しかし誰も彼の声を聞こうとしない。彼の声は届かない。差し伸べられてたその手を払いのけ鼻で笑う。みんな自分の遊びに夢中だ。面白いことがしたいんだ。

楽しくないことなんてやりたくない。イルミネーションで飾られた街は愉快的なことがいっぱいだ。夢のような偽りに世界が浮かれている。

電車が止まりドアが開いた。僕は降車する人たちに混じってホームに降りた。改札口へ向かう階段で、何気なくふと目を上げた。混雑する人たちの中、一人の女子大生の姿が目に入った。肩までの髪、少し大柄な体躯、そして、新鮮な甘い果実を思わせるような雰囲気。その後ろ姿ですぐにあの人だと思った。

僕は気づかれないように、顔を伏せて改札を抜けた。彼女は僕に気づくことなく、人ごみに消えて行った。彼女はなぜこの街に来たのだろう。どこかで誰かと待ち合わせでもしているのだろうか。

彼女は子供のように無邪気で無垢だった。生まれてくる世界を間違ってしまったのかと思わせるような人だった。その背中にはまだ小さな羽が残っているかもしれない。

彼女は目をそらすことなく、まっすぐ見つめていた。曇りない澄み切った瞳は、まったく何も疑っていなかった。夢や希望は叶えられるとでも思っているかのようだった。その純粹さが

怖かった。

彼女は、ガラスのように壊れてしまった。そして重く硬い扉を閉じてしまった。やがて彼女は少しずつ死んでいく。この世界のことと知るたびに、その瞳は輝きを失っていく。傷つくたびに、その純粋さは死んでいく。そして僕の胸深くには、割れたガラスの欠片が刺さっている。

「あれ、久しぶりですね」

聞き覚えのある声だった。

顔をあげると、関野が目をまるくして立っていた。

「こんなところで何してるんですか？」

彼は変わらない笑顔を見せた。

僕と彼は近くのフラワーガーデンという喫茶店に入った。清潔で西欧風の可愛らしさのある店だった。店内には色鮮やかな花々が飾られ、心地よいピアノの曲が流れていた。窓の外には樹木が見え、のどかな避暑地を思わせた。

「もう辞めてもう二年くらいですか」

彼はアイスマルクのストローをぐるぐるかきまわしながら言った。

「太田さんもとうとう辞めましたよ。来月、うちの会社も撤退します。ほとんどの人が辞める予定です。おれらメンテナンスはそのまま吸収され残りますけど、保健やらでいろいろ引かれてかなり苦しくなりますよ」

そこは現実からかけ離れた偽りの世界だった。僕は約五年間、その人為的に創造された空間にいた。日々、現実を忘れようと多くの人たちがやって来た。彼とはそこで知り合った。年齢も近いことから、僕らはよくともに行動していた。

「そうそう、この前、すぐそこで暴行事件あったでしょ。うちのバイトのやつが目撃してたらしくて、その一人がどうやら前にうちにいたやつらしいですよ。そいつは同じバイト仲間のカネを盗んで、ストーカーまがいのことをしてクビになったやつなんですけどね」

彼はテーブルに肘をついて続けた。

「おれもたまたまレジャー施設の駐車場の前を通りかかったとき、そいつを見かけたんですよ。たぶんいっしょにいたのが共犯のやつらだでしょう。やつら、打ち上げ花火をしたり、バイクで追っかけっこしたり、女の子にちょっかい出したりで、そこはもう無法地帯でしたよ」

彼は顔をしかめ、汚らしい害虫を払いのけるかのように、一つ鼻から息を吐いた。

「あっ、そうだ」

不意に彼は腕時計を見て思い出したように顔をあげた。

「これから芝居観に行きませんか？ チケット二枚もらって、友だちと行くはずだったんですけど、そいつが急に行けなくなったんで、一枚あまってるんですよ」



彼は芝居のチラシを取り出しテーブルに置いた。

「六時半開演だから、もうそろそろ行かないと間に合わないんです。どんな芝居かわからないんですけど、チラシ見るかぎり喜劇みたいです。どうですか？」

いまさっきの苦々しさが嘘だったように、彼は笑顔を耀かせた。

制服の少女たちは、駅の階段にすわり込んでおしゃべりを続ける。飲食したゴミがその足もとに散乱している。少女たちは人生の大半を使い果たしたような精気のない曇った目をしている。

行き交う人たちは足早に通り過ぎる。少し眉根をよせ、煙たそうに顔を背ける。少女たちはおしゃべりに夢中だ。訝る大人たちには気にもとめない。

生きていても面白くないしつまらない、と少女は言う。将来のことをなんて考えない、今が楽しければいい、と大口を開けて笑う。

大人たちは、今に後悔するのは自分たちだ、と蔑んだ目を向ける。そして、こんな若者たちばかりでこの国はどうなるのだ、と今日も嘆く。

「ねえ」

大きなスーツケースを手に、少女は僕の正面に立った。黄色いTシャツに黒いジーンズをはいている。右頬のえくぼが目立った。

「お願いがあるんだけど」

茶色がかった髪をしている。同じ年ごろの女の子に比べると、ほとんど飾り気がない。歳は十六、七ぐらいだろうか。

「少しの間、これあずかってくれない？」

少女は赤色のスーツケースを指差した。

「ちょっと行くところがあるんだけど、持って行けないし」

家出でもして来たのだろうか。僕はその大きなスーツケースが気になった。

「気になる？」

少女はまるで僕が思っていたことがわかっていたかのように言った。

「実は強盗してきたの」

真顔の少女は声をひそめて言った。

本当なのか、それとも冗談なのか、僕には判断がつかなかった。どう答えていいかわからず、口ごもってしまった。

すると少女は笑い出した。

「もしかして本気にしてる？ なか見てみる？」

少女は大きなトランクの前にし、僕を見た。

僕は小さく首を振った。

「日が暮れるまでならここにいるけど。それまでにもどって来ないと、そのまま残していっちゃ

うよ」

「ありがとう」

少女は軽く手を合わせた。

「オジサンは絵描き？」

「違うよ」

「じゃあ、何で描いてるの？」

「なぜだろ？ 描きたいからかな？ 自分でもよくわからない」

少女は困惑したような複雑な表情をした。

「それから言っとくけど、ぼくはまだオジサンじゃないよ」

僕は、ある著名人の名をあげ、その人物と同級だと教えてやった。

「じゃあオジサン、わたしのお母さんといっしょだ」

少女は動揺する僕を見てまた笑った。その右頬にえくぼができた。

それじゃ、オジサンと呼ばれてもしかたがないかも知れない。いつの間にかこんなにも時は流れている。

少女は僕の動かすペン先を、しばらく何も言わず見つめていた。一重まぶたの長い睫毛が、瞬きするたびに鳥の羽のように羽ばたいた。

歳のわりに芯はしっかりしている。意識してか、しないでか、相手に気を配っている。それらの何気ないところから、今までに苦労してきたことがうかがいしれる。しかしそんな片鱗を少女は見せようとはしない。子供のように無邪気なところもあるが、同世代の少女とは違っている。

「ねえ、あずかるかわりに描かしてくれない？」

断られるのを承知で僕は言った。

「いいよ」

彼女は拍子抜けするほどあっさり答えた。

「でも残り少ないよ」

少女は頁数の少ないスケッチブックを見つめて言った。

「描いても気に入らないと破って捨てちゃうんだ」

「じゃあ、あんまりうまくないんだね、オジサン」

少女は両手から放たれた蝶のように軽やかに手を振って去って行った。

僕の目の前に大きなスーツケースだけが残された。まるで脱皮した昆虫の抜け殻のように思えた。

道端に捨てられた新聞には、テロのことが大きく載せられている。僕は彼女のスーツケース

にそっと耳を近づけてみた。その中からは、冷たく時を刻む時計の音が微かに聞こえた。

めったに鳴らない電話が鳴った。それは大学時代の友人からだった。彼と話すのも二年か三年ぶりだった。

卒業生の同窓会の名簿のことで、僕の住所を知らせて欲しいと、大学から彼のところへ連絡があったらしい。それで教えていかどうか、確認するためにかけてきた電話だった。

僕らは片田舎の大学に通っていた。まわりは何もなかった。数軒の飲食店と、下宿屋があるくらいだった。そんな中で、僕らが仲よくなったのは一年間の寮生活だった。

その寮の入寮期間は一年生の一年間だけとなっていた。寮生は、二年に上がる前に下宿先をさがし、寮を出て行かなければならなかった。

四階建ての古い寮は、一階に食堂、大浴場、談話室、会議室、二階から四階までは廊下を挟み、部屋が十室ずつ並んでいた。

酔っ払った寮生が三階から飛び降りたとか、どこかの部屋で首を吊ったとか、浴場や洗面所の鏡に霊が映るとか、そんな噂話が伝わっていた。

学部は違ったが、僕と彼は他の仲間たちとよくいっしょに行動した。ダンスパーティーや合コン、ディスコやアイススケート、それから夏休みや春休みには旅行をしたりした。

今思うと、この時期は何も考えてなかった。将来のことなど気にしてなかった。日々が活力に満ちていた。不安はなかった。未来は明るく思えた。希望のようなものを感じていた。夢みたいなものがあったのかもしれない。そのころには多くのチャンスと可能性があったのかもしれない。

彼は卒業して数年後に結婚した。かつての仲間も今では結婚している。みんな家庭を持ってしまった。いいかげんだった連中も、子供ができて見違えるほど変ってしまった。

彼もかつての仲間も元気にやっているみたいだ。大学を卒業し、みんな就職してすっかり社会に溶け込んでいる。僕だけがまだそれを拒んでいる。

それから数日後、大学から同窓会報が届いた。それには一ヶ月前に行われた懇親会のことが載せられてあった。あるホテルで開催され、来賓三五名、一一七名の参加と、同窓会の支部が各地に九つできたということが報告されていた。

日が暮れ、駅前の広場で若者が歌いはじめる。ギターを激しく掻き鳴らし、自身の主張をがなりたてる。

暗がりに潜むクチナワは獲物を狙う。我がもの顔のマシラは牙を剥き、他を威嚇する。

人々は現実から目をそらす。享楽に目を奪われる。ブッダやメシアが現われても耳を傾けない。自分の欲気に時間を費やす。そして耳障りなブッダやメシアを異常者として抹殺する。

危機が目の前に迫るまで動かない。足元の毒蛇が首をもたげるまで、その危険を理解しない。その時には遅すぎる。世界は歪んでいる。

関野が言ったように、レジャー施設の駐車場で少年たちを見た。彼らのことははっきりと覚えている。背丈や格好、声、仕草、すべてまだ記憶に残っている。あの青年を暴行した少年たちに違いない。

少年たちは花火を打ち上げ、夜空に光が広がるたびに歓声をあげる。通りがかりの人たちは彼らに関わらないよう、目を落とし足早に過ぎて行く。そんなことをよそに、自分たちの遊びに夢中だ。まわりの人の迷惑など考えない。彼らはそれを面白がっている。近隣の住人たちは耳を塞ぎ、静かな朝が訪れるのを待っている。

「友だちいないの？」

えくぼの少女は言った。

僕はペンを走らせながら頬をゆるめた。

少女の右眉を描いた。それは濃くも薄くもなく、長くも短くもない、平均的な眉だった。そして大して特徴のない右眉の下に右目を入れた。一重まぶたで切れ長の目は、疲れきったように輝きがなかった。

「さみしくない？」

その目がさらに悲しそうに揺れた。

「もうなれたよ」

僕はペン先を見つめたまま言った。

左の眉は右にくらべて少し上がっていた。その下に右目より少し大きい左目を入れた。瞬きをするたびに長い睫毛が扇のように上下した。

しばらくすると、少女は飽きてきたのか、タバコに火をつけた。彼女は僕に一本差し出した。僕はそれを断った。

「わたし、家出してきたの」

少女は他人ごとのように言った。

僕は傍らの赤色の大きなスーツケースが目に入った。

「母親の彼氏が嫌いなんだ。でも、彼女もまだ若いから仕方ないの」

「彼氏？」

「本当の父親とは小さいころ別れたの。居場所はわかってるけど、別に会いたいとは思わない」

「これからどうするつもり？」

僕は言ってしまってから後悔した。

そんなこと少女にだってわかっている。訊かれるまでもなく何かしら思っているはずだ。僕がそれを訊ねたところでどうにもならない。親切心を見せて、いい人ぶっているだけだ。

それは少女の自由を奪い、可能性を無視し、型の決まった現実には繋ぎとめようとする。

「どうにでもなるわ。わたし、歌手になりたいんだ」

少女はそれを気にすることなく、打ち払うかのような明るさで答えた。

少女に悲観さなんてない。どこまでも前向きだ。少女はまだまだ若い。柔軟性とみずみずしさがある。そして勢いがある。それを止めてしまう恐怖もまだ育っていない。若い分だけ可能性とチャンスがある。

少し天を向いた小さな鼻を描いた。そして、意外に上品に見える口もとと、並びのいい歯を入れた。卵型の輪郭をなぞり、短めの髪を描くと、最後に、笑うとできる右頬のえくぼを入れた。

「オジサン、いつもここにいるの？」

少女は言った。

「気が向いたときだけね」

「仕事は？」

「いや」

「結婚は？」

十七歳の少女もそう問いたくなる。

空を仰いでみるが、くすんだ空に星はない。大人たちは何かになれと急かしている。僕はいまだにそれが何だかわからない。だからいまだに考えている。

考えすぎじゃない？ と少女たちは言う。やりたいと思ったことやればいいじゃないの？ と笑い飛ばす。

確かにそうだ。考えなければ恐怖も生まれない。歳をとるごとにああだこうだと考えてしまう。そして視野が狭まってゆく。

少女たちはわずらわしい知識をつけていない。社会の枠にはまっていない。だから救いがある。だから可能性がある。

少女たちのスケッチブックには、何も描かれていない真っさらな頁がまだ多く残されている。だからいろんなものを描くことができる。枠から飛び出した、自由な絵だって描ける。

「花屋のおねえさんにもらったの」

少女は軽く握ったこぶしを突き出した。

僕が手のひらを出すと、そこに小さな黒い種をこぼしていった。

「何の種？」

僕はその小さな種に目を近づけた。

「何だったか忘れちゃった。育ててみて。花が咲くから」

歩む小径の先にはまだ大通りは見えていない。しかし少女はそんなこと気にしていない。足に傷を負っても不幸だと思っていない。

少女は大きなスーツケースを転がしながら、少し重い足取りで歩きだした。しばらく行って振りかえると、人ごみの中でにっこり笑った。そして小さく手を振った。

夕暮れの雑踏の片隅に、暗い目の少年はぼんやりすわっている。まるで亡霊のようにその陰は薄く消えかかっている。

そばを歩きかう人々は誰も少年に気を止めない。その陰の薄さのせい、ほとんどが気づか



ず行ってしまふ。気づいてチラリと目を向けた通行人も、視線をもどしそのまま通りすぎる。

少年は眠いのか、それとも寒いのか、背を丸めたままじっとしている。彼はいつまでも顔を上げない。

手紙が届いた。薄っぺらい封筒だった。中に一枚の便箋が入っていた。二週間ほど前に「彼の人」が逝ってしまった、と書かれてあった。悲しいほど短い文面だった。

病にかかったとは知らされていた。以前、届いた手紙ではその病症について書かれていた。めったにかからないめずらしい病気らしかった。しかしそれを苦しんでいる様子はなく、むしろ、いろんな発見をしたりして楽しんでいる、と知らされていた。

これまでも何度か生死をさ迷うようなことがあったと言う。その度にこちら側にもどって来ていた。僕は今度もまた克服するものと思っていた。

しばらく連絡が途絶えたままになっていた。もしかすると、という予感があった。そして、いつかこういう日が来るとは思っていた。

しかし「彼の人」が逝ってしまったことに悲しみなんてものはない。また悲しむ必要すらない。入れ物は失われてしまったが、その意識はどこかにありつづけているはずだ。

生活感というものがまったくうかがえなかった。瓦礫のようなごちゃごちゃした感じや、混濁した色彩めいたものが一切なかった。僕が「彼の人」に感じた色彩は、白、または透明だった。

妥協を許さないという厳しさは、その内側から伝わって来るものだった。しかしそれを誰かに強いわけではなかった。親しみやすく、人間的なところもあった。それらは偏った感情からくるものではなかった。自分本意のものではなかった。

僕はすべて見透かされている気がいつもしていた。そばにいと、自分の歪んだ部分が浮び上がって見えた。ただ「見る」という行為にでさえ、自身の汚れた自我を感じうんざりすることがあった。「あなたは自我が強いですねえ」と僕を診て言った。

あるとき、「あなたは何がやりたいんですか？」と、そんなことをめずらしく訊いてきた。僕がそれに返答すると、「やってみたらいいですよ」と言った。そのあと決まったように、「でも物事を理解してからです」と付け加えた。

僕はつながりがあることに、安心していたところがあった。しかし、ぼやぼやしている間に水先案内人はいなくなってしまった。

僕はまだその雰囲気を感じている。存在をまだこの空間から感じとることができる。しかしやがては、それも薄れて消えてしまうのかもしれない。

フラワーガーデンは数人の婦人たちでにぎわっていた。店内にはこの間と同じピアノの曲が流れていた。その穏やかな調べも、婦人たちの会話でかき消されていた。

窓際の席にすわり、僕はアイスコーヒーをウェイトレスにたのんだ。騒がしい店内と対称的に、窓の外に揺れる木々の枝葉は静かだった。

自分は正しいと思っている。昔は間違っていたが今は正しい、と言う。そして数年後にもまた同じことを言う。

悪性の腫瘍は我が儘だ。健康である身体を蝕んでいく。足ることを知らないそいつは、欲望のままに次から次へと細胞を壊していく。その結果、弱っていく身体は滅びようとしている。それでも欲深い腫瘍は、知ってか知らずか自身の居場所を狭めてゆく。

婦人たちはすっきりした顔で店を出て行った。店内が急に静かになった。ピアノの曲が店内に染みわたる。

僕は伝票を手に取りレジに向かった。

「いま流れてるのは誰の曲ですか？」

僕はレジのウェイトレスに尋ねた。

そのCDのジャケットがレジの横に立てかけてあった。

「これ、いい曲ですね」

ウェイトレスは笑顔で言った。

中央公園の池で騒ぎがあった。ピラニアらしき魚を目撃したという。通報で慌ただしく警官がやって来た。遅れて専門家という人たちもやって来た。

大勢の人が物珍しげに池のまわりに集まった。警官たちは作業の邪魔にならないよう、野次馬たちを遠ざけていった。

池の水は抜かれ、どんどん少なくなっていった。水のなくなった池のあっちこっちで、魚たちは飛び跳ねた。大きな亀が数匹、コンクリートの池底でもがいていた。

逃げ場のないピラニアはすぐに発見され、専門家によって捕らえられた。獯猛な魚は鋭い歯を剥き出し抵抗しようとしたが、彼らの領域ではない水の上では無駄なことだった。

誰かが飼ってたものを池に放したに違いない、と警官と専門家は話していた。そして、理由はともあれ捨てるなんて無責任だ、と言った。

汚れたコンクリートの池底にはいろんな物が沈んでいた。空き瓶やペットボトル、ふやけた週刊誌に片方だけの靴、壊れた携帯電話も沈んでいた。そしてまだ新しい黒皮の財布もあった。その中には、数枚のメンバーズカードと、青年の顔写真の運転免許証が残されていた。

連日、公園には若者たちがやって来るようになった。誰が言い出したのか心霊スポットと称しては、深夜に大勢でやって来た。手入れされた木々も荒らされ、食べ散らかされたゴミだけが残されている。彼らは近くの住人たちの迷惑も顧みようとしない。人家の窓ガラスを割ったり、外壁に落書きをしたり、つながれたペットにいたずらをしたりする手の付けられない者たちもいる。

そんな彼らが、森の奥で大きなスーツケースを見つけた。それは何が入っているのか、かなりの重さがあった。彼らは面白がって、その中に死体が詰められている、などと言って同行の女の子を怖がらせた。それは冗談のはずだった。

スーツケースが赤色だったせいと、あたりに明かりもなく暗かったということで、底に漏れ出た染みに彼らは気づかなかった。

彼らはスーツケースの鍵を壊してそれを開いた。その瞬間、彼らの表情は強ばり一変した。言葉を失い、わなわなと震えた。

その中には、皮肉にも若者が言った通り、死体が入っていた。冷たくなった少女は、窮屈そうに膝を折り曲げ丸まっていた。虚ろな目は宙を漂っていた。黄色いTシャツの胸あたりが赤黒く汚れていた。

血の付いた少女の似顔の色紙が、近くに破り捨てられていた。その笑顔の右頬にはえくぼがあった。

すぐに大勢の警官がやって来た。やって来るなり、慌ただしく立ち入り禁止の黄色いテープを張り巡らせた。崖の下の茂みから衣類などが見つかった。小さな目覚まし時計は、正確な時間を指して動いていた。

レジャー施設の駐車場には相変わらず少年たちがたむろしている。若い女性を通りがかると、からかったりつきまとったりしている。民家の塀を乗り越え、無断で庭を走りぬける。飼い犬は小屋の中でブルブル震えている。

暗い夜道では少年によるひたくり事件が多発している。少年たちは数人のグループで、かよわい女性を狙っている。味をしめた少年たちは犯行を重ねている。

中央公園の人通りのなくなった遊歩道には、薄暗い外灯が寂しく灯っていた。空には月も星もなかった。風もなく、常緑樹の枝葉も息を潜めたように動かなかった。

銀髪の少年は、その静けさを打ち壊すかのように、大きな声で携帯電話に向かってしゃべっていた。暗がりには少年の足音だけが石畳に鳴っていた。

突如少年は立ち止まり、「バッグの中で死んでたやつ？」と声を弾ませた。そして再び歩き出し、「バイシュンだろ？ 犯人はその相手のやつじゃねえの？」とあざけ笑った。

少年はしばらく歩いたあと、あたりをキョロキョロと見まわした。少年が振り返ったとき、そのつぶらな目が僕を見た。

少年の表情は無邪気であどけなかった。まるで僕らが友だちであるかのような笑顔だった。意表をつかれ一瞬、躊躇した。しかし大きく振りかぶっていたその手を、僕は止めることはなかった。頭蓋ほどの石は、容赦なく少年の頭部を打ち抜いた。

少年は自身を滅ぼそうとする意趣に、まったく気づいていなかった。そしてこの手には、不思議なほど衝撃はなかった。

少年は祈りを捧げるかのように、僕の足元にひれ伏した。銀色の頭髪がじわじわと赤毛に変わっていった。そのまま少年は動かなくなった。傍らには携帯電話が転がっていた。

背後で悲鳴があがった。振り向くと金髪の少女が表情を強ばらせていた。小刻みに震える右手には、白い携帯電話が握られていた。

僕は両手にあるそれを草むらに投げ捨て、早足にその場を立ち去った。後ろをふり返ったが、少女や少年の仲間が追ってくることはなかった。

しばらくして、頭部が碎ける嫌な感触がこの手に甦ってきた。気分が悪くなり吐きそうになった。少年の振り向いた笑顔が脳裏に甦ってきた。振り払うもそれは、まわりつく蠅のように離れなかった。

ごみ箱の新聞に事件のことが小さく出ていた。十七歳の少年は頭蓋骨骨折で危険な状態にあると書かれてあった。

ポケットの中にはえくぼの少女からもらった種が入ったままだった。この種からどんな花が咲くのだろう。咲いたならその花はいくらか世界を変えるだろうか。僕はその種を蒔く場所を求め森を歩いた。

森を少し入った大きな木の下に仔猫が捨てられていた。くたびれたダンボール箱の中で、まだ目が開いていない仔猫は消え入りそうな声で鳴いていた。僕はそっと抱きあげた。少し力を入れすぎると呼吸を止めてしまいそうなほど弱々しかった。虎斑の仔猫はざらついた小さな舌で僕の指を舐めた。

少年の仲間たちの動きが慌ただしくなった。その仲間たちは犯人を捜し出そうと躍起になっている。彼らは襲われた少年の復讐に奮い立つ。まるでゲームを楽しむかのようだ。

草むらから血のついた頭蓋ほどの石が見つかった。それには銀色の頭髪が数本はり付いていた。少年のあとをつけていた不審な男を見たという証言が出た。そして少年は依然として意識がもどらなかった。

黒髪の清楚な女性は、迷うことなく僕の方に歩いてきた。彼女の明るい笑顔は遠くからでも輝いて見えた。この前とは違いすぎる変わりように、誰だったろうと思った。

僕の前に立ち、彼女ははずかしげに微笑んだ。僕は彼女に不思議なものを感じた。それは言葉ではないもの。思考ではなく、また感情でもないもの。それは無色透明で明るく灯っているようなもの。

「意識がもどったんです」

その瞳は生き生きとし、明るい希望に向いていた。

「今は言語に少し障害があるけど、すぐにもと通りしゃべれるようになるそうです」

そして、こんなことを彼女は言った。生きているってということ、それだけでありがたい。大丈夫。生きているってことは、それはもしかして奇蹟かもしれない。私はそんなことに掛け替えのないものを感じている。

「ありがとう」

彼女が僕に言った。

僕には身に覚えがない。よく耳にする響きだけど、何を指しているのか理解できなかった。それは不思議な言葉だった。彼女と僕との間に、距離も隔たりも感じさせなかった。まるでずっと昔から、親しい友人であったかのような錯覚をもたらした。

彼女が知るはずがない。もし、知っていたとしても、「ありがとう」なんて言うわけがない。

「ぼくは何もしてません」

僕は声を冷たくして言った。

「結婚するんです」

彼女はそんな僕を包み込むように微笑んだ。

恨みも憎しみも感じられなかった。損だとか、得だとか、それらがまるで些細な事であるかのようにだった。彼女から感じたことは、ここにこうして在るというようなことだった。意味なんて問わない。ただその不思議な現象と共ある。

仔猫が鳴いた。彼女がダンボール箱の仔猫に気づき、目を細めた。

「かわいい」

彼女はしゃがみ込んで、やさしく虎斑の仔猫に触れた。

「よかったら育ててやってくれませんか」

僕は無理だろうと思いながらも訊いてみた。

「僕はこいつを育ててやることはできません」



「はい」

彼女は明るく即答した。

「ほんとですか？ こいつは捨て猫で貰ってくれる人を探していたんです」

「育ててくれる人がいないんでしょ？」

彼女はやさしく仔猫を抱いて僕をまっすぐ見た。

僕は思わず目を反らした。彼女の瞳はまぶしすぎる。暗がりに慣れた僕に直視はできない。

「名前は何ていうんですか？」

「名前はまだありません。あなたがいい名前をつけてやってください」

「ありがとう」

彼女は微笑んだ。

「ありがとう」

僕も弱い笑みを彼女に返した。

黒髪の女性は仔猫の前足を小さく振り、笑顔を残して去って行った。

PHSの着信音が鳴った。関野からだった。

「こんどみんなで集まってワイワイやるんですけど、よかったら来ませんか？ この間、会ったことを話したら、みんな懐かしがってましたよ。それから太田さんや、他にも何人か辞めた人も来ますよ。だから来てくださいよ」

それは数日後に予定された飲み会の誘いだった。僕は、行けるかどうかわからない、と答えた。

「それじゃあ、明後日また電話しますから、それまでに決めておいてください」

そして、関野は思い出したように言った。

「あっ、そうそう……、この前、暴行事件の少年のこと話してたじゃないですか。そいつ誰かに殴られて意識不明の重体だったらしいんですけど、とうとう死んだみたいですよ。やつも今までいろんな人に迷惑かけて来ましたからね、その報いですよ。これも自業自得というやつですよ。今、その仲間らが必死になって犯人捜ししてますよ。なんでも少年の彼女っていうのが、犯人を目撃したらしいんです」

街頭演説の政治家もどこかへ行ってしまった。共同募金の女子中学生もいなくなった。夕暮れの遊歩道は、帰宅する人で人通りも多くなっていた。

街のイルミネーションもあざやかに点りはじめた。壁や電柱に無造作に貼られた訝しげなビラが風にはためいている。にぎやかな店頭にたむろする未成年は、タバコをくゆらしている。チラシ配りの若者は女性にしつこく付きまとう。ギターを掻き鳴らす少年は、重苦しい空にわめき散らしている。

僕はペンをゆっくりと動かした。濃くも薄くもなく、長くも短くもない眉。一重まぶたで切れ長の目と、扇のように長い睫毛。少し天を向いた小さな鼻。上品に見える口元と、並びのいい歯。卵型の輪郭。短めの髪。そして右頬のえくぼ。まだあの少女の特徴を覚えている。

サラリーマン風の男の姿を見なくなった。ここのところずっと見ていない。異次元から来た彼は、腐敗したこの世界を見捨て去ってしまったのだろうか。どうしようもない僕らに失望しまったのだろうか。

人ごみの中にあの人の後ろ姿があった。行き交う人々の間に見え隠れする女子大生の彼女を、僕はずっと目で追った。

すると不意に立ち止まり、視線を送る僕に気づいていたかのように振り返った。彼女は花開くように鮮やかに微笑んだ。

僕はあわてて目をそらした。しかしその笑みは僕に対してのものではなかった。

彼女の前で背の高い若者が足を止めた。彼女は若者と二言三言ことばをかわすと、肩を並べて雑踏に消えていった。

自分が蒔いた種は自分が刈り取らねばならない。

金髪の少女は憎しみの目で僕を指差していた。まるでそれが暗い目の少年への合図のように思えた。金髪の少女と、暗い目の少年には何の関わりもない。少女が少年に合図を送ったわけではない。偶然そのように重なっただけだった。少年は似顔絵を見て表情を変えた。よくある偶然の出来事だった。

少年は狂い出した。刃先の欠けた果物ナイフをあたりかまわず振りまわした。暗い目は狂気に変り、炎のように燃えあがっていた。先の欠けたナイフなんて哀しすぎる。憐れな少年。彼に夢なんてなく、希望もない。

僕はその少女のことを覚えていた。駅の階段にすわっていた制服の少女だった。彼女を庇おうと思ったわけではない。彼女はたまたま僕に向いた刃先の間に入ってしまったのだ。

少女は足がすくみ動けなくなっていた。先に身体が動いていた。そこには不思議と恐怖はなかった。

憐れな暗い目の少年は、正義感ある大人たちに取り押さえられた。暴れて抵抗するも、その小さい身体ではどうすることもできなかった。

少年はえくぼの少女の似顔絵を見て変わった。少年は急に狂い出したかに見えた。しかし一気に沸点まで達したのではない。少しずつたまっていたものが、ついにその許容量を越えて溢れ出てしまったのだ。

少年たちは狂い出す。それは歪んだ世界のせいなのか。少年たちは反抗する。先のことなんてわかりはしない。そんなこと考える余裕なんてない。それは大人たちの世界への反逆なのか。その行動は自身の正気を保とうとしてのことなのか。

大人たちは自身が正しいと思っている。顧みることもしない。大人たちはヘドロに埋もれる沼底から抜け出せない。しかし少年たちにはまだ可能性がある。まだ柔軟に物事をとらえることができる。

駅の階段にすわっていた制服の少女は、突然のことに立ちすくんでいる。蒼ざめた顔に涙さえ浮かべている。このまま僕が消えてしまうと思って脅えているのか。

気にすることは無いのに。少年のナイフは僕に向いていたのだから。こうなるべきことだったのだから。

さっさと立ち去ればよかったのだ。自分本意で身勝手に、責任感なんて欠片もなさそうなのに。恐怖で動けなかったのか、それともひっそり隠れていた良心が足を止めさせたのか。

けたたましいサイレンの音が近づいて来る。騒々しい見物人は僕がどうなるかが気になっているのだ。まったくよけいな世話だ。だが彼らを責められるのか。僕も彼らと同じだ。

ごみ箱の新聞には不正や暴力ばかりが報道されつづけている。遠巻きの見物人は、非日常的な出来事に興奮している。

利口な人たちはバカなやつと言うだろう。間違っていると笑うだろう。でも次の瞬間がなければ、そのような思考も意味を成さない。比較だけの損得や優劣も、もはやガラクタに過ぎない。

「彼の人」はこう言っていた。考えるからいけない、何も考えないでやることだ、と。

目を閉じれば何も見ない。耳を塞げば雑音に惑わされることもない。よけいなことを考えない。何も考えない。否定もしない。肯定もしない。今、この現実のありのままを感じている。

僕という存在は、単に無機質な表現の一つでしかない。それは物事を識別するだけの記号だ。その動きはただの信号に過ぎない。大げさに騒ぎ立てる感情は、実体のないまやかした。

世界は狂っている。そう識別する自分自身も同じく狂っている。目にするものが歪んで見えるのは、僕自身が歪んでいるからだろう。

蒼ざめた少女は震えている。直視した現実には脅えている。しかし世間からすればそんなの些細なことだ。次の瞬間には忘れ去る。

これは何かの終りではない。きっと、次の始まりでもある。そして僕は精一杯の笑顔を作ってみせる。果たしてこれが少女に伝わるだろうか。

## ガーデン

<http://p.booklog.jp/book/107635>

著者：スワプナ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/831016/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/107635>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/107635>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ